

10 橋

(※浪曲・ウチナー・歌詞ど忘れバージョン)
詩・曲・編曲：趙博
with 大倉正之助 大鼓 / Afurica Sunu)

<浪曲>

難波津や 花橋も ヘドロの薰り 流れも汚し
大和川 仕事にあぶれる頃となり 松の緑の色も褪せ
泉州堺は良い刃の出所 息子やりたや 出稼ぎに
ここは名代の生駒の西 上町台地を結界に
産声上げし 東洋の マンチェスターと唄われました
難波・大阪 環状線を〜

[科白]

日本生まれの大阪育ち どっから見ても日本人だが よ
〜く見てみりゃ朝鮮人 口も荒いし気も荒い だけど大
阪・難波を語らせりゃあ こいつの右に出るものはねえ。

(かけ声) そいつは誰だい？！

泥の河で産湯を使い キムチの臭いに誘われて ニンク
喰って どてやき喰って 煮ごり喰って さいぼし
喰って 油かす喰ってー大きくなりゃあがったぜ
110 キロ！ 神武このかた在日朝鮮人の数ある中で 趙博
てえのは俺一人だい。こいつが一番上手いやい！

不弁ながらも〜 務めます〜

- 1 水の都を川面に映す 光きらめく ビジネスパーク
誰が決めたか 再開発は 銭とイラチの浪速のド根性
鉄さえ喰らう プルガサリ 泣く子もだまるアパッチ
部落 昔のおもかげは いつの間にかに消え去った
大阪環状線 京橋駅 下車 歩いて10分の 帰り道を
ちどりちどりの あしどりで
- 2 焼け跡・闇市が今にも残る ガード下の 屋台も消
えて 韓国料理は 高級グルメ 笑い豚さえ フゴフ
ゴほくそ笑む 商売上手はお手のもの 誰が言ったか
コリアタウン 平野運河のどす黒さ 手垢にまみれた
「在日」ばかり 大阪環状線 鶴橋駅 下車 歩いて10
分の 帰り道を ちどりちどりの あしどりで
- 3 膠(にかわ)のにおいが ほんのり残る 木津の河原
でソーキそばとキムチをほうばる けものの皮をはぐ
代償に 人間の皮まで はがされた ひとはスラムと
言うけれど ここは天国 釜ヶ崎 ふるさはここな
んだと 胸をはって 歌い継ぎたい 大阪環状線 芦
原橋駅 下車 歩いて10分の 帰り道を ちどりちど
りはもうやめよう

猪飼野

バラック/スラムの問題は、在日コリアンにとっては、身近な問題の一角をなしていた。かたや部落解放運動が公営住宅を獲得するという大きな成果を得つつあるとき、在日コリアンが、日本国内でそうした要求を行なうにはきわめて困難な状況であった。というのも、彼ら・彼女らは総連や民団という疑似国家に間接的に帰属する状況にあり、権利擁護の要求を抑制する傾向にあった。特に総連側は日本の海外公民として、内政問題には触れないという立場から、昭和34(1959)年から北朝鮮への帰国事業を展開、その後の参政権獲得運動や、地方公務員の国籍条項撤廃運動にも参加しなかった。それゆえ、人びとは自助的・互助的な生活を営んできたのである。

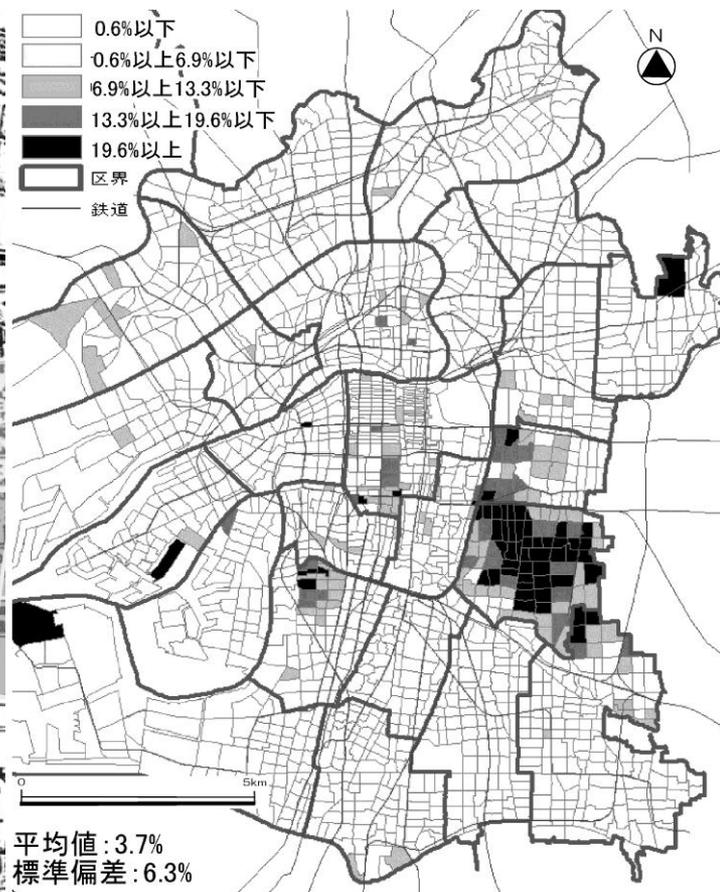
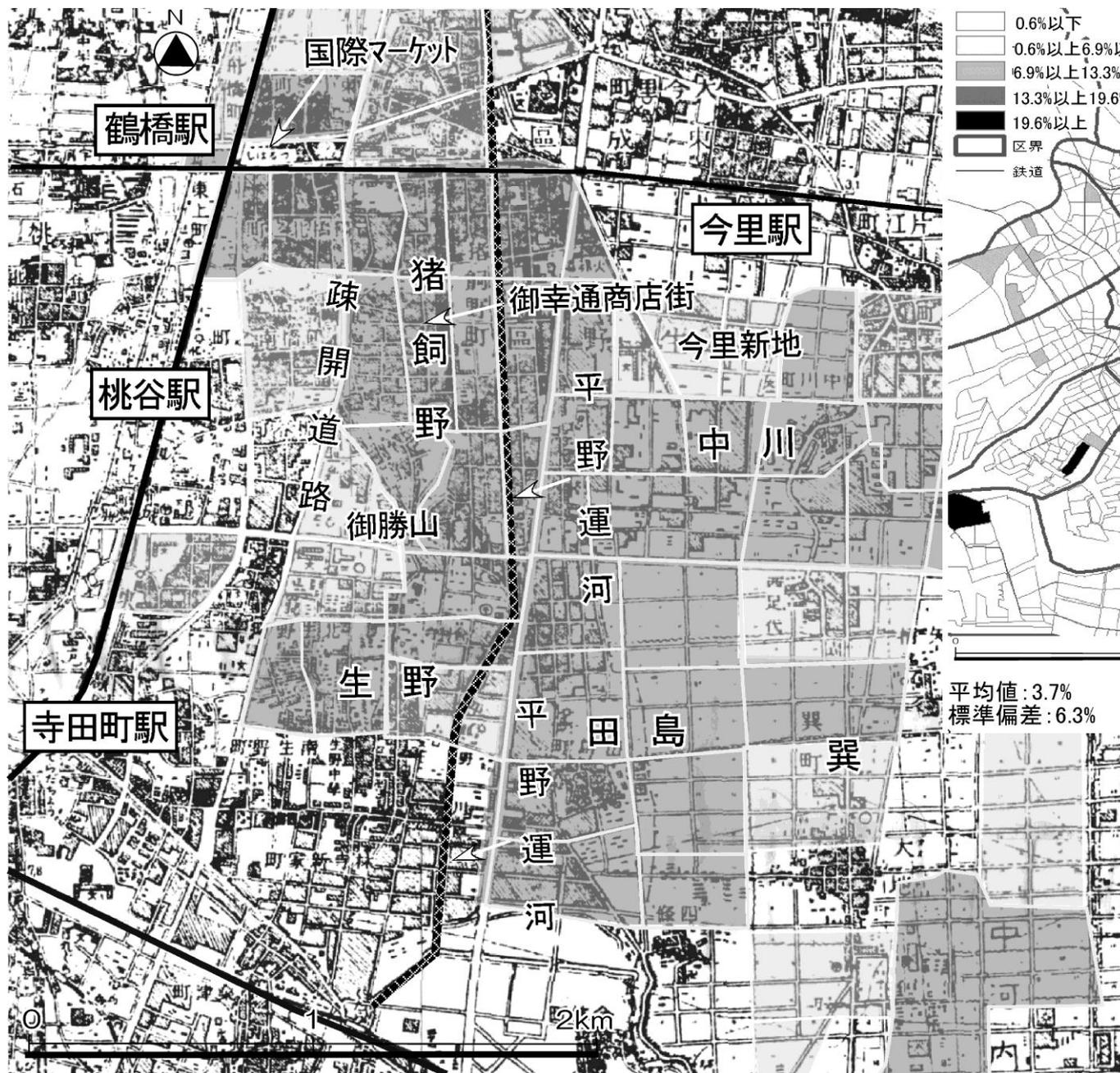
在日コリアンの集住地区としては、大阪市の生野区が著名である。図9B-1(3分の2頁大)は、平成12(2000)年の町丁別の外国人比率の分布を昭和22(1947)年の地形図に重ね合わせたものである。濃い部分が在日コリアンの集住地区となっている。集住地区の特徴は、第一にほぼ戦災にあっていない場所、第二に戦前の土地区画整理地区で戦後も空閑地になっていた場所であった。

集住地区の中心は、町名の上では猪飼野であった。大正8(1919)年の平野運河開削以降に、旧藩政村で当時は東成郡鶴橋村の大字であった猪飼野は、鶴橋耕地整理組合によって区画整理された。しかし、建築線が指定される前に長屋が急速に建築されたため、ひじょうに密集した街区が誕生したのである。そこに移住してきたのが朝鮮半島の出身者であり、日本最大の在日コリアンの街の発祥となったのである。

黄民基『奴らが哭くまえに一猪飼野少年愚連隊』は、昭和30年代前半の生野の在日コリアンの若者、少年たちを描いた実録に近い小説である。

大阪はもともと長屋とロオジ(路地)の織りなした街だった。「水の都」、「八百八橋」として情緒豊かにイメージされるのはあくまで表の顔でしかなかった。一步、裏手に入れば、水はけの悪い湿地にトタン屋根の五軒長屋、十軒長屋がまるで魚のうろこのように密集して建ち並び、長屋と長屋の間隙を縫ってロオジが迷路をなして走り、共同便所から汚物がタレ流された。こうした長屋は東に向かうほどに密集度を濃くしてゆき、それにつれて細民街の広がりやを伴わせていた。わたしたちの住んだ場所はそんな大阪下町の標本となるような長屋だったといつてよかった。(黄, 1998: 13)

猪飼野の外縁、生野区から東大阪市にかけての当時の居住環境を見事に描写している。このような劣悪ともいえる居住環境は、ヘップサンダルや関連ゴム製造業の労働を糧として、自助的・互助的に更新されていった。その結果、バラックは姿を消し、狭いながらも長屋、そして2階、3階建ての一戸建てで比較的落ち着いた居住環境を維持している。日本人人口の減少が止まらないなかで、在日コリアンの人口は安定した推移を示すことになる。



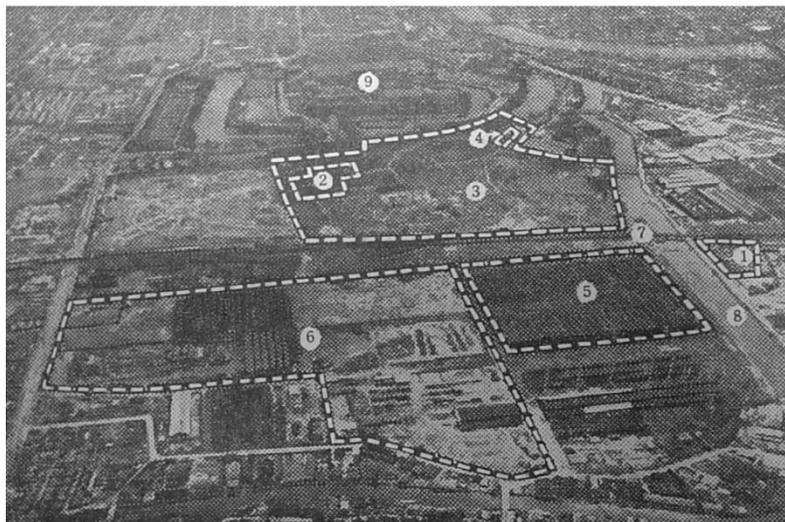
0.6%以下
 0.6%以上6.9%以下
 6.9%以上13.3%以下
 13.3%以上19.6%以下
 19.6%以上
 区界
 鉄道



平均值: 3.7%
 標準偏差: 6.3%



“アパッチ族部落”のたたずまい。向うに城東線の電車と日生球場のナイター設備がみえる（大阪市城東区中浜一丁目）

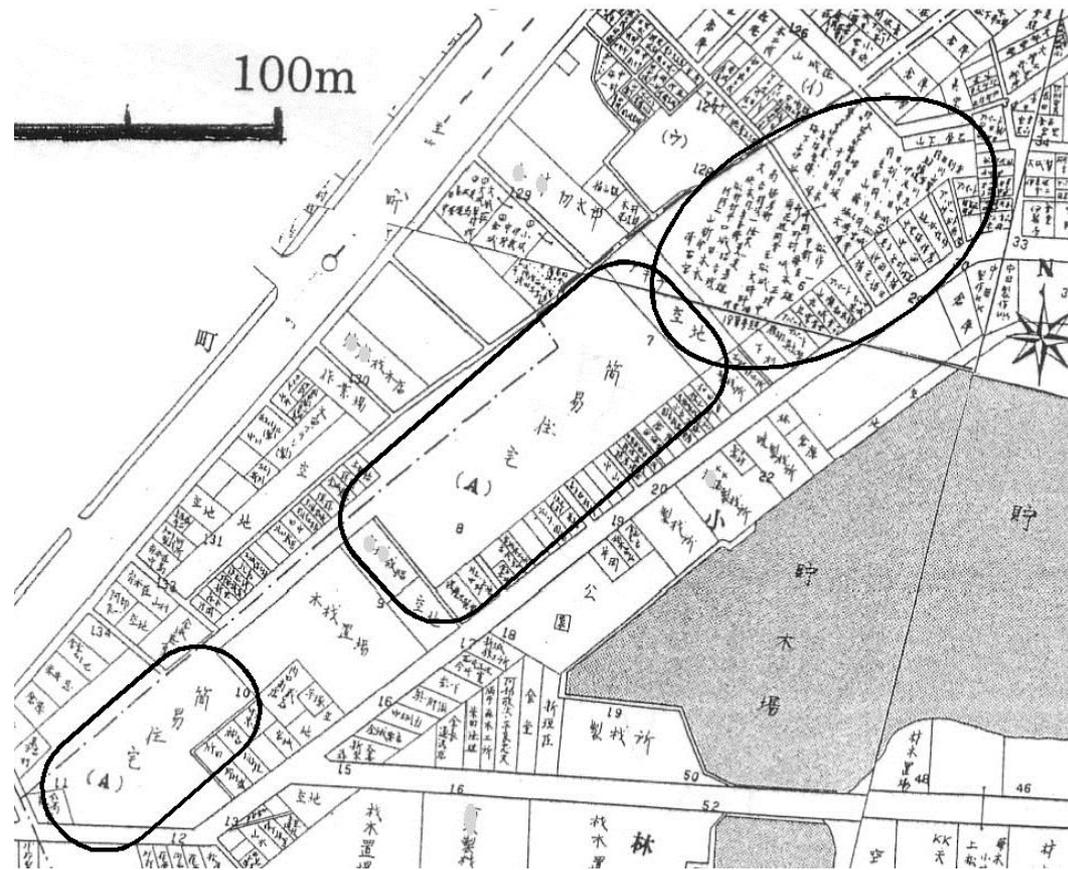


旧造兵廠付近 ①アパッチ部落②旧造兵廠第二六旋倉庫③大阪市公園予定地④近畿財務局杉山分室⑤旧造兵廠第二旋工場⑥大阪市交通局車庫敷地⑦城東線⑧平野川⑨大阪城



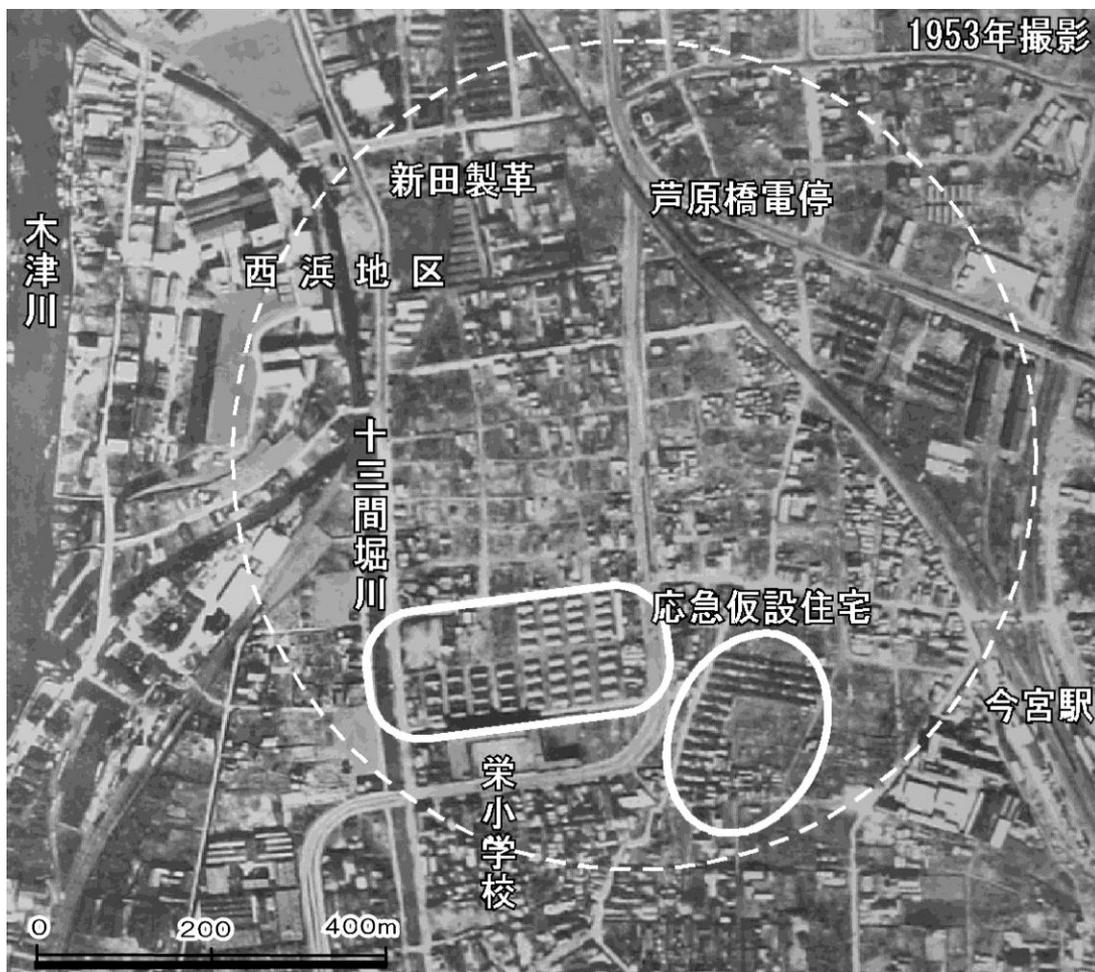
- もうひとつ忘れてならないのは、昭和20(1945)年8月14日の空襲で壊滅した大阪砲兵工廠の跡地の鉄などのスクラップ持ち出しを果敢に行なった通称「アパッチ族」をめぐる出来事である。その舞台は当時の城東線、現在の大阪環状線大阪城公園駅の近傍であった(図9B-4 3分の2頁大)。昭和25(1950)年ごろ平野川沿いの低地の焼け野原に居ついたひとりの老婆が土地を切り売りしたことで、周囲にバラック集落が広がる。後に真の所有者が現われたものの、住民とのあいだで暫定使用が認められたことなどにより、都市雑業、零細工場労働者のバラック地区として存続する。ところが、昭和30(1955)年ごろからはじまった平野川堤防の改修工事にともない、工廠跡地に入出入りできるようになる。工廠の跡地には膨大なスクラップ金属が残されており、それらが高値で売れることに目を付けた人びとが大量に流れ込んでくる。
- 在日の人たちが主にすんでいたバラックに大勢の金属掘り目当ての人々が流れ込んだのである。この金属の夜陰にまぎれた掘り出しで、跡地を警備する守衛や警察による摘発を受け、その攻防戦から身を守るための合図が当時ちょうど封切されていたアパッチ族の映画に似ているということで、アパッチ族となづけられる。マスコミなどもこの攻防戦をアパッチ族という名称を使いながら書き立てることになる。昭和30年から34年にかけての出来事であった(写真9B-1 2分の1頁大)。
- マスコミの報道の中で、1958年7月31日から8月2日に朝日新聞夕刊で連載ルポルターージュが行なわれるが、その名もずばり「アパッチ族」であった。しかしその後の攻防戦で犠牲者を多く出すことになり、かつ近辺の工場もその対象とされ始め、法律的にみて窃盗団という汚名と、世間からの孤立という事態に、最終的には、1959年8月にアパッチ族の解散となる。ラジオでも1959年3月に「アパッチとやぶ医者」、小説家開高健の「日本三文オペラ」(『文学界』1959年1月1日号～7月1日号、7回連載)の舞台ともなる。小説とは言え、その舞台が、他に、新世界、ジャンジャン町、京橋駅付近などであり、モツ料理をほおぼるアパッチ族というラインが浮き出し、またこのアパッチ族解散に手を尽くしたのが、釜ヶ崎の赤ひげとも呼ばれた医師、本田良寛であり、そのことは自著の『につぼん釜ヶ崎診療所』(朝日新聞社、1966年)であったことも偶然とは言え、そしてその著書にもかなりの頁をさいて、実際にアパッチ部落の患者を往診したり、最後には部落の解散に助っ人したことを経験に、当時のことを触れている。





大阪市の南西部、大正区の片隅に“沖縄スラム”と呼ばれる一角がある。大正区小林町。大阪湾にそそぐ尻無川口にあるこの一帯は、もともと、貯木場と製材所の多い材木の町であった。それが、戦災と昭和二十五年秋のジェーン台風で壊滅した。大手の製材所や材木商は、となりの住吉区へ移った。市の区画整理事業で造成されたままの空地が、そこに残り、ゴミがつもり、草がのびて荒れ放題。再開発が進められている大阪の中で、忘れられている地域である。ジメジメした湿地帯の上にひしめくバラック。そこに約千五百人の人が肩を寄せ合って生きている。そのうち約三割が沖縄出身者だ。

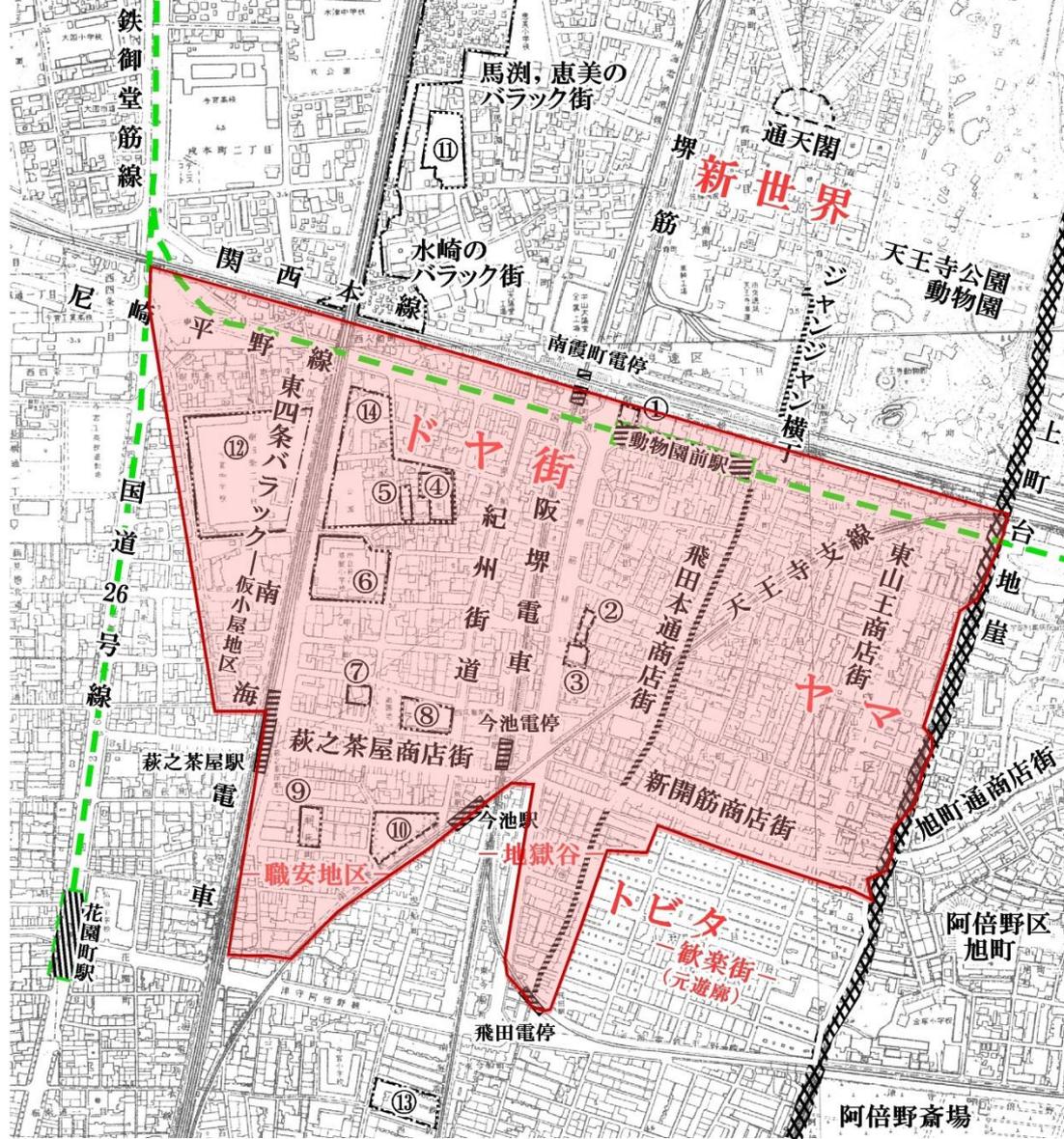
表通りから、一步路地へ踏み込むとバラックの密集地帯だ。長さ約四百メートル、幅百メートル前後の細長い土地に四百世帯が住み、廃材を打ち合わせただけの軒先をぬって迷路で入り組んでいる。バラックの床下をドブが流れ、あふれた水は家の土間へ流れ込む。ちょっと雨がふれば地区全体がドロにぬかるみ、一向に乾かない。床上浸水は年に二、三回は必ず起きる。そして町をおおう下水とゴミの腐った匂い。ほとんどの家は一間だけ。炊事場があるのはいい方だ。自分の家に水道の蛇口があるのは、全世帯のやっとなり半分。便所さえも共用のところが多い。火事になったら致命的である。地元の消防署も「火を消すことは不可能。人命救助だけを考えているが・・・」と診断する(朝日新聞、1968年7月15日)。



地主や市当局から不法占拠といわれ、きびしく立退きを迫られているが、これを一口に不法といわれるべきものだろうか、戦前汗と涙で築き上げた住まいが、戦争戦災で、一切を失い、残ったのは冷たい差別であり、西浜も大国町に勢力を奪われ、落ちぶれた街になってしまった。ましてや終戦後の混乱で、地主もわからず位置からバラックと建て、水を掘り、道路を広げ、焼け跡を清め、魂のこもった血と涙の結晶である現在の家、これを世間からは無慈悲にも不法占拠と呼ばれるのだが、戦災で無に帰してから、西浜では3000世帯、開出城で3000世帯まで街が復活したが、半数は不法占拠となっている。このような街にしてしまった冷たい差別の中で、もっとも大きくはっきりしているのが、大阪市の仕打ちである。焼けた1万戸に対して、わずか100戸の応急住宅だけであり、最近建設され始めた住宅には入居できない。

- 都市計画行政でも、敗戦後12年間西浜の復興をお守りしてきた者が、不法占拠という無法者にされてしまう。市民税も固定資産税も払い、共同募金にも協力し、防犯協力員にもなり、隣組もつくっているにもかかわらず、水道や清掃は来ないし、金融や市営住宅入居の資格がない。火のつくような立退きを迫られている500世帯は西浜を離れて、どこにも行くところはなく、再び不法占拠を繰り返すばかりであり、物乞いを余儀なくされる人も出てきている。ぜひ鉄筋住宅やブロック住宅に住めるように念願する。すでに京都市や兵庫県では部落の人たちに適した市営住宅があてがわれている。大阪市の民生局は部落対策にあたっていると聞かすが、同じ屋根の下の建設局は部落民を苦しめているとしか言いようがない。要するに不法占拠の問題は、不真面目で無茶な人間がやっているのではなく、西浜が部落であり、部落差別が根強く残され、このような事情があるのに、十分な部落解放の方針を持たずに、西浜で住宅建設と都市計画を推し進めている大阪市政には、重大な責任がある





このような中、社会状況は、日雇い労働をめぐる手配師による搾取の問題、売春防止法によって発生した違法売春、それに暴力団がからむという構図が1950年代後半に顕著に見られるようになってきた。木賃宿街と近接する遊郭からなる鉄道に囲まれた特異な市街地に対して、メディアはどん底社会釜ヶ崎、東洋のカスバというような名称を与え、負のイメージを流布させてゆく。当時の釜ヶ崎に対して、特に社会学を中心に都市病理的アプローチからさかんに調査がなされたが、その調査で掲載された地図を、描きなおしたのが図10A-4(1頁大)である。新世界、ヤマ、トビタ、そしてドヤ街にそれぞれの地理的表象がこめられつつ、この全体が、釜ヶ崎、あるいはより広範に西成と称され、独特の空間として、捉えられるようになった。これに対して地元では西成愛隣会を立ち上げ、事態の改善に乗り出したのが、1960年であった。表10A-2にあるように、この年に民生局主導で、戦後はじめての行政施策が、西成愛隣会の結成など通じて着手され、それは暴動翌年の愛隣会館、愛隣寮の開設などに繋がる。同時に1961年8月の暴動により、多くの一連の施策が一挙に動き始めた。そしてその最終局面が、表10A-2にあるように1970年のあいりん総合センターと、翌年の市立更生相談所の登場にあった。ここにあいりん体制が完成し、あいりん地域が登場する。

- ①市立愛隣寮 ②市立西成市民館 付設保育所 ③市立愛隣会館 あいりん学園(小中学校)
- ④市営今宮改良住宅 ⑤旧四恩会館 乳児院→初代西成労働福祉センター
- ⑥萩之茶屋小学校 ⑦旧済生会今宮診療所→西成市民館 ⑧西成警察署 ⑨西成職業安定所
- ⑩東萩公園(三角公園) ⑪馬淵生活館 ⑫今宮中学校 ⑬大阪自彊館
- ⑭後のあいりん総合センター敷地(愛隣住宅改良地区指定)



第3回レポート課題について

テーマ:大阪の光と影 その2 裏大阪と思われてきた、あるいはそう思われている地域を探訪使用—大阪環状線各駅めぐり マイノリティの三日月地帯を意識して

- ① の地図は、鶴橋駅
- ② の地図は、新今宮駅
- ③ の地図は、今宮駅
- ④ の地図は、大正駅
- ⑤ の地図は、猪飼野地区

今回は上記の①～④のうちから2箇所選ぶ、あるいは、①と⑤地区の在日コリアンの集住地区のペアを選ぶコース、どちらかの組み合わせを選んで、フィールドワークをおこなう。

それぞれの地区の特徴と着眼点については、本日(7月18日)の授業時間に説明する。その際につかった資料は[こちら](#)からダウンロードすること。フィールド対象地域の背景に関する若干の叙述を乗せている。

各駅周辺、あるいは猪飼野について(中円は半径100m、外円は半径250m)、写真は各地区2枚(厳守)、そして駅周辺地区の印象に関して、ポイントに目をつけながら、250字以上300字以内で叙述すること。合計、写真4枚、文字数は500字以上600字以内となる。

なお受講生が多く、地域に迷惑をかけることにもなるので、写真をとる場合には、くれぐれもフラッシュをたいたり、迷惑にならないように気をつけてください。

地図のダウンロード

持参する地図は各自DLすること、下記の3枚である。印刷は精細モードで。必ず地図の画面を右クリックして、ダウンロードしてから、そのファイルを印刷することを勧めます。

[①の地図](#) [②の地図](#) [③の地図](#) [④の地図](#) [⑤の地図](#)

⑤の地域の位置関係は、①の地図の右下が、⑤の地図の左上に接続していることで判断すること。

提出方法

メールで次のアドレスに送ること osaka.chiri@gmail.com
@は全角なので、半角に直して送信あて先に使用すること。

必ずメールの題名(subject)に「大阪地理レポート山本」(山本のところは自分の名前)と記すこと (一度に送れない場合には、題名に「大阪地理レポート山本1」あるいは「・・・2」と記すこと)

本文の最初に、学籍番号、名前を必ず記すこと

なお本文は、水内の読みやすさを優先するため、添付ファイルにはせず、メール本体にじかに書くこと。
デジタルカメラでの添付写真のファイルサイズは小さいほうがありがたい。携帯の場合は、逆に小さいとみえにくいので、大き目のサイズ、640×480のサイズがいちばんいいかと。もちろん、個人のホームページにアップしてくれても結構。なお受講生が多く、地域に迷惑をかけることにもなるので、写真をとる場合には、くれぐれもフラッシュをたいたり、迷惑にならないように気をつけること。

メールでの提出期日は、8月1日(水)の午後6時とする。受領のメールは次々回の受講時までに行う。受領メールがない場合には、次回講義時に確認する。

どうしてもメール提出が不可能な場合には、8月1日(水)の午後5時までに、文学部棟361室(水内研究室)の前のピンクボックスに同じ書式で直接提出すること。